

## 『決定往生集』における暫信暫不信の得失

— 辺地胎生の構造 —

服部純啓

## 〔抄録〕

『決定往生集』において珍海は、一向専精信受を「信心決定義」の大前提としながらも、「暫信暫不信」という、心が不安定な状態である人々であっても、極楽往生が可能であることを論じている。この「暫信暫不信」による往生とは、暫信の期間に信心が確定するので極楽往生が確定するのであるが、暫不信という欠点を有していることから極楽の辺地へ胎生するという二重の構造

になっている。本稿では、「暫信暫不信」の得失に注目し、『決定往生集』における辺地胎生往生の構造を考察する。

キーワード 『決定往生集』、正果決定、暫信暫不信、辺地胎生、

珍海

## はじめに

珍海撰『決定往生集』、第二正果決定<sup>①</sup>には、疑心雑修の人の往生として極楽の辺地へ胎生することが論じられている。疑心胎生往生をめぐる問題には、①『大阿弥陀経』、『平等覚経』、『無量寿経』の相違、②「辺地」「胎生」の概念解釈、③仏智の分類、④疑惑という行為と往生の関係、等の問題が指摘されている<sup>②</sup>。

『決定往生集』正果決定において珍海は、『観無量寿経』における中

品・下品の往生人と、『無量寿経』・『平等覚経』に説示される中輩・下輩の往生人とを同一視し、『平等覚経』の中輩・下輩に関しては「暫信暫不信（教えを暫く信じ、暫く信じない）」という心が不安定な状態である人々であっても、極楽往生が可能であることを論じている。珍海においては、暫信の期間に信心が確定するので極楽往生が確定するが、暫不信という欠点を有していることから極楽の辺地へ往生し、蓮華のつばみの中（胎内）で長時間過ごさなければならぬという、二重構造がみられる。本稿では、「正果決定」において論じられ

る「暫信暫不信」による得失の解釈を提示し、珍海が理解していた辺地胎生往生の構造の一端を明らかにする。

## 一、先行研究の整理

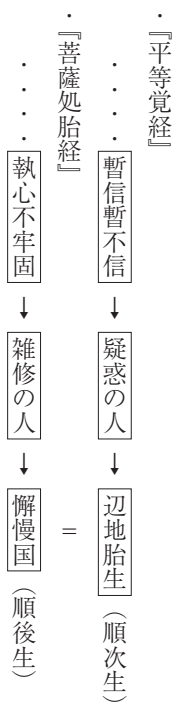
管見の限りでは、珍海の辺地胎生と憊慢国に関する問題を扱ったものに、若林隆壽<sup>(3)</sup>、成瀬隆順<sup>(4)</sup>の研究がある。

まず若林は、辺地胎生と憊慢国往生の捉え方について、珍海の浄土教系文献のうち『菩提心集』、『決定往生集』をもとに考察している。

若林は、「憊慢国と極楽辺地とを全く同一視するというのは、それまでの『往生要集』や、『往生拾因』には見られない考え方であり、ここに珍海が、凡夫の機根を専修にも耐えざるものとして、深い内省を以て捉えると同時に、逆に「一切衆生悉有仏性」という根本原則にのっとって、とにかく西方極楽浄土への決定往生という形で救いとうとする決意が窺われるのである<sup>(5)</sup>」という。さらに辺地胎生と憊慢国を同一視する珍海の立場について、「珍海の立場は疑心胎生と雑修憊慢往生とを同一の次元で捉え、極楽への究極的な往生、すなわち第三生における往生を以てこれを決定往生とするものであったことが理解されるのである<sup>(6)</sup>。」と論じており、珍海における決定往生とは、第三生（次の次の生涯）において極楽へ往生することであるとしている。

次に成瀬は、平安浄土教に影響を与えたとされている新羅浄土教思想の中から、特に憬興の生因願に対する考え方が珍海に与えた影響を考察し、『決定往生集』にみられる「下輩人の暫信による順次往生」という往生観と第二十願の位置づけを検討している。その中でも特に

正果決定において使用される「暫信暫不信」の語義を考察し、『菩薩処胎経』所説の憊慢国と極楽の辺地胎生を同所とし、『菩薩処胎経』の「執心不牢固」と『平等覚経』所説の「暫信暫不信義」を会通させていることを指摘し、次のようにまとめている<sup>(7)</sup>。



さらに『菩薩処胎経』で執心不牢固とされる『平等覚経』所説の「暫信暫不信」の下輩人が、順次生において決定往生することが、珍海にとつての「信心決定義」であることを指摘する。そして辺地胎生と憊慢国とを会通する珍海の意図を「おそらくは、執心不牢固で専心に念仏できない下輩人の凡夫が、「暫信」によつて雑修の人であったとしても、往生が可能となることを論証したかったと考えられる<sup>(8)</sup>。」とまとめている。

先行研究によつて指摘されている珍海の立場は次のようにまとめられる。

- ① 憊慢国と極楽の辺地胎生を同一視する。
- ② 疑心胎生と憊慢を同じ次元で捉え、極楽への第三生における往生を決定往生とする。【若林説】

③「暫信暫不信」と「執心不牢固」を会通させ、疑心雜修の下輩人が順次生において往生が決定することを「信心決定義」とする。

#### 【成瀬説】

決定往生を第三生と捉えるか、順次生と捉えるかの点で差異がある以外この疑心雜修の下輩人がなぜ暫信によって往生を得ることが可能であるかという往生の構造的問題には触れられていない。

### 二、「暫信暫不信」についての考察

#### (一) 信心と疑心

『決定往生集』において規定される信心と疑心に関しては、序論部において、経文と道理と信心を挙げて往生が決定することを論述する、いわゆる三種決定の項に以下のように述べられている。

其信心者、若於如上文理之中、心生信受即名決定。以決定者爲信相故。故觀經云、必生淨國心得無疑。〈已上〉無疑即信、決定稱也。又由信故必得往生。故經說云、若能深信無狐疑者、必得往生阿彌陀佛國。〈鼓音聲經〉由此應知。下輩之人、雖未一向專精信受、而由暫信亦得往生。此乃信心決定義也。<sup>9)</sup>

【訓読】その信心とは、若し上の如き文理の中に於て、心に信受を生ずるを即ち「決定」と名く。「決定」とはこれ信の相なるを以ての故に。故に『觀經』に云く、「必ず淨國に生ぜんものは心に疑ひ無きことを得よ」と。〈已上〉「無疑」は即ち信なり。決定

の稱なり。又信に由るが故に必ず往生を得。故に經に説きて云く、「若し能く深信して狐疑無き者は、必ず阿彌陀佛國に往生を得」と。〈鼓音聲經〉此に由りて應に知るべし。下輩の人、未だ一向專精に信受せずと雖も、而も暫信に由りてまた往生を得。此れ乃ち信心決定の義なり。

この一節が『決定往生集』における珍海の信心解釈の基本姿勢である。この信心決定の一節に関しては坂上雅翁によって、

教文・道理の中に教えを信じ受けとれるようになれば決定であり、その信じて疑がない心つまり信心によって往生を得と<sup>10)</sup>している。

と指摘されるように、珍海は、經の文言や、道理を心に信じ受け入れる(信受)ことが「決定」<sup>11)</sup>であるとしている。そして『觀經』や『鼓音王經』の説をその根拠とする。下輩人に関しては、「未だ一向專精に信じ受け入れなくても暫信によって往生が可能である」とするのである。ここで珍海が提示している「信心決定義」とは、疑心を抱かずに信受することで往生が確定(決定)することを大前提<sup>12)</sup>(総)とし、下輩人(中輩人も同様)については、暫らく信受すること(暫信)で往生が確定すること(別)とまとめられる。

## （二）暫信暫不信と疑心の関係

『決定往生集』において、「暫信」及び「暫信暫不信」の用語は、序論冒頭と第二正果決定にのみ使用されており、先学によって珍海が、「執心不牢固」と「暫信暫不信」を会通させて理解していることが指摘されている<sup>(13)</sup>。序論において示されているような下輩人の暫信による往生とはどのようなものであろうか。「正果決定」には、まず『平等覚経』中輩段を引用するが、その中に「暫信暫不信」の語が含まれている。

佛言、其人、奉行施與如是者、若其然後中復悔、心中狐疑、不信分檀布施作諸善、後世得其福不信、有無量清淨佛國不信往生其國中。雖爾、其人、續念不絶、暫信、暫不信、意志猶預無所專據、續結其善願爲本、續得往生。<sup>(14)</sup>

【訓読】佛の言はく、其の人、施與を奉行することは是の如くなる者、若し其の然して後に中ごろ復た悔し、心中に狐疑して、分檀布施し諸善を作して、後世に其の福を得ることを信ぜず、無量清淨佛國有ることを信ぜず、其の國中に往生することを信ぜず。爾りと雖も、其の人、續念絶えず、暫くは信じ、暫くは信ぜず、意志猶預して専ら據る所無く、其の善願を續結して本と爲れば、續きて往生を得。

中輩の者の中で布施等の善業を行っても、その行いの途中に善業を積むことについて後悔し、疑いを抱きながら諸々の善業を修めて、後

の世にその福德を得ることを信じず、極楽浄土の存在を信じず、極楽への往生を信じなくとも、絶えず阿弥陀仏を念じ、暫くは信じ、暫くは信じなかったりして心にためらいがあり、定まることがなくても、その立派な願いを立て続けて根本に据えればやがて往生が可能であるという。つまり、「暫信・暫不信」で往生を得るためには、絶えず阿弥陀仏に対して思いを馳せ、善い願い（願往生心や諸善を作す思念のことか？）を立て続け（続結）てそれを中心に据えなければならぬのである。ここでは、阿弥陀仏やその浄土を信じていようが信じてまいが、「続念不絶」とすることからもわかるように、基本的には阿弥陀仏やその浄土を念じ続けるのである<sup>(16)</sup>。であるから、「狐疑」とあるように、疑心を抱いていても往生が可能なのである。

珍海が引用する『平等覚経』において「暫信暫不信」の語句は、中輩段に二回使用されているのみである。では珍海はなぜ序論において「信心決定義」を解説する中において「下輩之人、雖未一向專精信受、而由暫信亦得往生」<sup>(17)</sup>と述べて下輩人が暫信によって往生が可能であると示したのであろうか。この「暫信暫不信と下輩人に関する珍海の理解は次の『平等覚経』中輩段の引用直後の一節において次のように述べ、その理由を示している。

中輩如是。下輩略同之。<sup>(18)</sup>

【訓読】中輩是の如し。下輩もほぼこれに同じ。

このように珍海は、『平等覚経』に説示されている中輩と下輩を、

ほぼ同じものであると理解しているのである。つまり中輩段を引用することによって、下輩人もその引用する内容に当てはめて考えることで中下兩輩の往生人が暫信によって往生できることを示しているのである。

### (三) 得失の整理

さて、正果決定では、右の、疑心往生について、以下のような疑問が提出される。

問。若疑心者、亦得往生、何故三種決定之中唯取信心爲決定耶。<sup>(19)</sup>

【訓読】問ふ。若し疑心の者、また往生を得ば、何が故ぞ三種決定の中に唯だ信心を取りて決定とするや。

ここでは、もし疑心の者もまた往生を得るのであれば、どうして序論において論じているような三種の決定の中で信心だけを取り上げて決定とするのかと述べている。これに対して珍海は、以下のように回答する。

答。信は決定義。故約信明決定。應知。此人、雖生疑悔、於暫時定業已成。故經說言暫信暫不信也。良以此人、有得。有失。由信故往生。由疑故在胎。<sup>(20)</sup>

【訓読】答ふ。信は是れ決定の義なり。故に信に約して決定を明す。まさに知るべし。此の人、疑悔を生ずと雖も、暫信の時に於

て定業已に成ず。故に經に説きて「暫信、暫不信」と言ふ。まことに以れば此の人、得有り。失有り。信に由るが故に往生す。疑に由るが故に胎に在り。

ここでは信とは決定の意味であるとし、信について決定を明らかにしてゆくのである。この衆生については、疑いの心を起こしても、暫信の時に於いて定業が完成しているから、經(『平等覺經』)には「暫信・暫不信」と説いている。そしてこのような人には、利得もあれば、損失もあるとして、信によるから往生し、疑によるから胎内にありと示している。

以上のように珍海は、「暫信」ゆえに往生が決定し、「暫不信」ゆえに胎生となるとし、前者を「得」、後者を「失」と呼んでいる。

そもそも先の表のように、『決定往生集』では、『平等覺經』に説く「暫信暫不信」(疑惑人)と、『菩薩處胎經』に説く「執心牢固」(雑修人)を会通し、極樂の辺地胎生と懈慢国を同処と見なしている。<sup>(21)</sup>

珍海はこのような理解の上で、左の問答に見られるように、暫信・暫不信の得失を各三種類ずつに分類している。

問。凡夫行者、專修難得。故千万衆中乃有一人生。故今世人多是失乎。

答。若約次生、失而非得。約第三生、得而非失。又雙卷記判胎生者以爲其失。而彼既生。不可言失、且約九品論得失耳。總論得失各有三種類。得中三者、即三輩也。失中三者、如平等覺經等説。



聞而生謗以爲上失。墮地獄故。生憊慢國爲中品失。疑心胎生爲下品失。〈第三疑心胎生者通得失二門。<sup>(22)</sup>〉

【訓読】問ふ。凡夫の行者、專修得難し。故に千萬衆の中にすなはち一人生ずること有り。故に今世の人、多くは是れ失せんか。答ふ。若し次生に約せば、失にして得に非ず。第三生に約すれば得にして失に非ず。また、『雙卷の記』に胎生の者を判じて以て其の失とす。而れども彼れ既に生ず。失と言ふべからず。且く九品に約して得失を論ずるのみ。總じて得失を論ぜば各三種の類有り。得の中の三とは、即ち三輩なり。失の中の三とは、『平等覺經』等に説くが如し。聞きて謗を生ずるを以て上の失とす。地獄に墮するが故に。憊慢國に生ずるを中品の失とす。疑心胎生を下品の失とす。〈第三の疑心胎生は得失の二門に通ず。〉

ここでは、凡夫の行者は專修を得ることが難しいので、今の世の中の多くの人々は往生できないのではないか、との問いに対して、次生（次の生涯）に関して言えば失であり得ではないが、第三生（次の次の生涯）に関して言えば得であり失ではないとしている。そして、淨影寺慧遠（以降、「淨影」と略す）の『無量寿經義疏』において疑心を失として言及する。淨影の『無量寿經義疏』巻上には得失の両者を次のように説示している。

如來初問。彼國人民、有胎生者。汝復見不。阿難次答彰己已見。如來下復爲之具辨。第二段中、初彌勒問何因、何緣彼國人民、胎

生、化生。正辨胎生。約化顯之。爲是通問。下佛答之。於中先明胎生之因。若有衆生明信佛下明化生因。胎生因中先明其因。此諸衆生生彼已下明因得果就。明因中若有衆生以疑惑略明其失。修諸功德願生彼國略明其得。不了佛下廣明其失。於彼佛智疑惑不信。是其失也。<sup>(23)</sup>

【訓読】如來初めに「彼の國の人民、胎生者有り。汝、復た見ざるやいなや」と問ふ。阿難次に答へて己でに見ることを彰す。「如來」より下は復た之が爲に具さに辨ず。第二段の中、初めには彌勒、「何の因、何の緣あつて彼の國の人民、胎生、化生あるや」と問ふ。正しく胎生を辨ず。化に約して之を顯す。是を通問と爲す。下は佛之に答ふ。中に於て先づ胎生の因を明す。「若有衆生明信佛」より下は化生の因を明す。胎生の因の中に先づ其の因を明す。「此諸衆生生彼」已下は、因果を得ることを明す。因を明す中に就て「若有衆生以疑惑」は略して其の失を明す。「修諸功德願生彼國」は略して其の得を明す。「不了佛」より下は廣く其の失を明す。彼の佛智に於て疑惑して信ぜず。是れ其の失なり。

ここでは胎生の因を明らかにする中において、『無量寿經』「此諸衆生生彼」より下の文が胎生の因果を得ることを明かしているとし、その中でも「若有衆生以疑惑」の文が胎生の失を取り上げて説いているとする。そして「修諸功德願生彼國」の文は、胎生の得を取り上げ、「不了佛」より下にそれら全体（広）が失であることを説示している

とするのである。淨影が論じている『無量寿經』の該当箇所を確認すると次のように説かれている。

彼國人民、有胎生者。汝復見不。對曰已見。其胎生者、所處宮殿、或百由旬、或五百由旬、各於其中受、諸快樂如、忉利天上、亦皆自然。爾時、慈氏菩薩、白佛言。世尊。何因、何緣、彼國人民、胎生、化生。佛、告慈氏。若有衆生、以疑惑心、修諸功德、願生彼國、不了佛智、不思議智、不可稱智、大乘廣智、無等無倫最上勝智。於此諸智疑惑不信。然猶信罪福、修習善本、願生其國。此諸衆生、生彼宮殿、壽五百歲常不見佛、不聞經法、不見菩薩聲聞聖衆。是故於彼國土、謂之胎生。<sup>(24)</sup>

【訓読】彼の國の人民、胎生の者有り。汝、復た見ざるやいなや。對へて曰さく、已に見たてまつる。其の胎生の者の、處する所の宮殿、或は百由旬、或は五百由旬、各其の中に於て、諸の快樂を受くること、忉利天上の如くにして、亦た皆自然なり。爾の時、慈氏菩薩、佛に白して言さく。世尊。何の因、何の緣あつてか、彼の國の人民、胎生、化生なる。佛、慈氏に告げたまはく、若し衆生有りて、疑惑の心を以て諸の功德を修して、彼の國に生れんと願はんに、佛智、不思議智、不可稱智、大乘廣智、無等無倫最上勝智を了せず、此の諸の智に於て疑惑して信ぜず。然れども猶ほ罪福を信ずるをもつて、善本を修習して、其の國に生れんと願ず。此の諸の衆生、彼の宮殿に生じて、壽五百歳まで常に佛を見たてまつらず、經法を聞きたてまつらず、菩薩聲聞聖衆を見

たてまつらず。是の故に彼の國土に於て、之を胎生と謂ふ。

『無量寿經義疏』の説示に基づいて『無量寿經』の対応箇所を対照させると、淨影は疑いの心つまりは「疑心」によって胎生することを失とし、諸々の功德を修めて極樂へ往生することを得と解釈しているのである。そして諸々の仏智を疑惑して信じず、しかし罪福を信じることによって極樂往生を願う。そのような衆生は、極樂の宮殿の中に生まれて五百年間、仏の姿を常に見ることが無く、教えを聞くことも、聖衆のすがたを見ることもない。このような訳で極樂世界においてこれを胎生というと言っているのが全体的（広）に言う失であると判じるのである。淨影は往生の得失に関して、「極樂に往生していても、胎生であることによって総じて失」と理解するように否定的な立場をとる。それに対して珍海は「胎生であっても極樂に往生しているから得である」という肯定的な捉え方をしているのである。ゆえに珍海は、「極樂に往生しているから失というべきでない」と判じて淨影の説を批判するのである。そして「ここで淨影は、九品の得失を論じているだけである」としているのである。<sup>(25)</sup> ここまでに確認した珍海の得失解釈と淨影の得失解釈を整理すると以下ようになる。

【珍海】（『平等覺經』）

・得・・・作諸善↓極樂往生  
・失・・・中悔・狐疑↓胎生

【浄影】（『無量寿経義疏』）

・得・・・諸修功德↓極樂往生

・失・・・疑心↓胎生

「正果決定」における珍海の『無量寿経』の三輩段と『観経』の解釈は次に示す問答の中の一節によって理解することができよう。

問。時有差別。胎生經五百歳、九品中或六劫、十二劫、或七日、七七日。既爾。如何得相攝乎。

答。大經三輩、觀經九品、同異稍多。然許相攝。胎宮一事不足爲奇。夫往生之類、差降無量。文中互舉、出沒爲異。言雖不同、義實不違也。<sup>(26)</sup>

【訓読】問ふ。時に差別有り。胎生は五百歳を経、九品の中は或は六劫、十二劫、或は七日、七七日と。既に爾なり。如何ぞ相ひ攝することを得んや。

答ふ。『大經』の三輩、『観經』の九品、同異稍多し。然れども相攝することを許す。胎宮の一事、奇とするに足らず。夫れ往生の類、差降無量なり。文の中に互に擧げ、出沒異を爲す。言、同じからずと雖も、義、實に違はず。

ここでは、「時間には区別があり、胎生は五百歳を経、九品の中では六劫、十二劫、あるいは七日、七七日を経ると。現にこの通りである、どうして互いを含むことができようか」との問いに対して、『無

量寿経』の三輩と、『観無量寿経』の九品は、同異がやや多い。しかしながら相含んでいると認められている。胎宮の一事についても、異とするに足りない。そもそも往生の類別は上下の位の違いが計り知れない。文言の中に三輩九品が挙がっているが、文言にも出入りがあったり異なっている。このように言葉は同じではないが、意味内容は真実と矛盾していない」と答えている。つまり珍海は『無量寿経』に説く三輩と『観経』に説かれる九品を同一視しているのである。であるから浄影によって論じられている得失を『観経』の九品の内容と会通させて解釈していたのであろう。

#### （四）得失の分類

珍海が往生の得と理解する『無量寿経』所説の三輩段を見てみると次のように説かれている。

#### （上輩）

其上輩者、捨家棄欲、而作沙門、發菩提心、一向專念無量壽佛、修諸功德、願生彼國。此等衆生、臨壽終時、無量壽佛、與諸大衆、現其人前。即隨彼佛、往生其國、便於七寶華中、自然化生。住不退轉、智慧勇猛、神通自在。是故阿難。其有衆生、欲於今世、見無量壽佛、應發無上菩提之心、修行功德、願生彼國。<sup>(27)</sup>

【訓読】其の上輩の者は、家を捨て、欲を棄て沙門と作り、菩提心を發し、一向に専ら無量壽佛を念じ、諸の功德を修して、彼の國に生れんと願ず。此れ等の衆生、壽終の時に臨んで、無量壽



佛、諸の大衆と與に、其の人の前に現じたまふ。即ち彼の佛に隨ひて、其の國に往生し、便ち七寶の華の中に於て、自然に化生す。不退轉に住して、智慧勇猛、神通自在なり。是の故に阿難、其れ衆生有りて、今世に於て、無量壽佛を見たてまつらんと欲せば、應に無上菩提の心を發して、功德を修行して、彼の國に生ぜんと願すべし。

（中輩）

其中輩者、十方世界、諸天人民、其有至心願生彼國、雖不能行作沙門、大修功德、當發無上菩提之心、一向專念無量壽佛。多少修善、奉持齋戒、起立塔像、飯食沙門、懸繪然燈、散華燒香、以此迴向、願生彼國、其人臨終、無量壽佛、化現其身。光明相好、具如眞佛。與諸大衆、現其人前。即隨化佛、往生其國、住不退轉。功德智慧、次如上輩者也。<sup>(28)</sup>

【訓読】其の中輩の者は、十方世界の諸天人民、其れ至心有りて彼の國に生ぜんと願はば、行じて沙門と作り、大いに功德を修むること能はずと雖も、當に無上菩提の心を發して、一向に専ら無量壽佛を念すべし。多少に善を修して、齋戒を奉持し、塔像を起立し、沙門に飯食せしめ、繪を懸け、燈を然し、華を散じ、香を燒き、此を以て迴向して彼の國に生ぜんと願すれば、其の人、終りに臨んで、無量壽佛、其の身を化現したまふ。光明相好、具さに眞佛の如し。諸の大衆と與に、其の人の前に現じたまふ。即ち化佛に隨ひて其の國に往生す。不退轉に住して、功德智慧、次い

で上輩の者の如し。

（下輩）

其下輩者、十方世界、諸天人民、其有至心欲生彼國、假使不能作諸功德、當發無上菩提之心、一向專意、乃至十念、念無量壽佛、願生其國。若聞深法、歡喜信樂、不生疑惑、乃至一念、念於彼佛、以至誠心。願生其國、若聞深法、歡喜信樂、不生疑惑、乃至一念、念於彼佛、以至誠心、願生其國、此人臨終、夢見彼佛、亦得往生。功德智慧、次如中輩者也。<sup>(29)</sup>

【訓読】其の下輩の者は、十方世界の諸天人民、其れ至心有りて彼の國に生ぜんと欲せんに、假使ひ諸の功德を作すこと能はずとも、當に無上菩提の心を發して、一向に意を専らにして乃至十念無量壽佛を念じ、其の國に生ぜんと願すべし。若し深法を聞きて、歡喜信樂して疑惑を生ぜず、乃至一念、彼の佛を念じて、至誠心を以て、其の國に生ぜんと願すれば、此の人、臨終に夢のごとくに彼の佛を見たてまつりて、亦往生を得。功德智慧、次いで中輩の者の如し。

まず上輩では、「捨家棄欲」乃至、「願生彼國」の行を積み（得の因）、「臨壽終時」乃至、「神通自在」という果報（得）を得るとしてゐる。次に中輩では、「其有至心」乃至、「願生彼國」の行を積み、「其人臨終」乃至、「住不退轉」という果報を得る。次いで下輩では、「其有至心」乃至、「願生其國」の行を積み、「此人臨終」乃至、「亦得

往生」という果報を得ると説かれているのである。これに対して暫不信の失に関して珍海は「平等覺經」等に依り次のように示している。

【上品の失】 教えを聞いて誹謗し、地獄に墮ちること。

【中品の失】 懈慢国に生れること

【下品の失】 疑心胎生（疑心胎生は得と失の両方にあてはまる。）

この三品の失の典拠となる經典は、「正果決定」の中の引用文において次に示すように見出すことができる。

【上品の失】（『平等覺經』の引用文）

本宿命求道時、心口各異、言念無誠、狐疑佛經、復不信向之、當自然入惡道中、無量清淨佛、哀愍威神引之去耳。其人、於城中五百歲乃得出。往至無量清淨佛所、聞經心不開解。<sup>30</sup>

【訓読】 本と宿命に道を求めし時、心口各異に、言念誠無く、佛經を狐疑して、復たこれを信向せず、まさに自然に惡道の中に入るべきに、無量清淨佛、哀愍威神をもつてこれを引きて去るのみ。其の人、城中に於て五百歳にして乃ち出づることを得。無量清淨佛の所とに往至して、經を聞けども心開解せず。

【中品の失】（『菩薩處胎經』の引用文）

問。菩薩處胎經云、西方、去此閻浮提十二億那由他有懈慢界。國快樂、作倡伎樂。衣服飾香花莊嚴、七寶轉開床。舉目東視、寶床

隨轉、北視、西視、南亦如是轉。〔私云、自處座床隨廻願而轉也。意、欲顯示其中衆生、於諸妙境、見之受用而無勞倦也。〕前後發意衆生、欲生阿彌陀佛國何以故皆由懈慢執心不堅固〔云云〕准此經、說願往生者千萬衆中、乃有一人得生。餘即不能生。若爾、何得言決定往生乎。<sup>31</sup>

【訓読】 問ふ。『菩薩處胎經』に云く、「西方、此の閻浮提を去ること十二億那由他にして懈慢界有り。國土快樂にして、倡伎樂を作す。衣服服飾、香花莊嚴、七寶轉た牀を開く。目を舉げて東に視れば、寶牀隨轉し、北に視、西に視、南に視ることもまた是の如く轉ず。〔私に云く、自ら座する所の牀、廻願に隨ひて轉ずるなり。意は、其の中の衆生、諸の妙境に於て、久久に受用して勞倦無きことを顯示せんと欲するなり。〕前後發意の衆生、阿彌陀佛國に生ぜんと欲する者、皆深く懈慢國土に著して前進して阿彌陀佛國に生ずること能はず。億千萬衆、時に一人有りて、能く阿彌陀佛國に生ず。何を以ての故に皆懈慢にして執心牢固ならざるに由りてなり。〔云云〕此の經の説に準ずるに、往生を願ずる者千萬衆の中に、すなはち一人有りて生ずることを得。餘は則ち生ずること能はず。若し爾らば、何ぞ決定往生と言ふことを得るや。

【下品の失】（『十住毘婆沙論』・『後出阿彌陀仏偈』の引用文）

故云十住論偈云、若人種善根、疑即花不開。信心清淨者花開即見佛。又一切經中、彌陀佛偈云、有疑在胎中不合五百年。不疑

生臺座叉手無量前。<sup>(32)</sup>

【訓読】故に『十住論の偈』に云く「若し人善根を種うるに、疑へば、即ち花開かず。信心清浄なれば花開きて即ち佛を見る。」又一切經の中、『弥陀佛の偈』に云く、「疑有れば胎中に在りて合はざること五百年。疑はざれば臺座に生じて無量の前に叉手す」と。

珍海が、極樂の辺地胎生と懈慢國を会通して同处とみなす背景として、これら『平等覺經』、『菩薩處胎經』、『十住毘婆沙論』、『後出阿弥陀仏偈』に基づいた理解がある。珍海は得と失との両方に通じる三品の中で最も輕微な下品の失である疑心胎生と、中品の失とする懈慢國への往生を会通して解釈することにより、中下両品の失を得に振り替えたのである。しかし、本来、得として挙げているのは、『無量壽經』の三輩段である。つまり珍海が往生の得として取り上げるのは、行を積み、仏の姿を見て極樂へ往生することである。しかしそれに反する疑惑中悔の者も極樂の辺地といえども往生が可能となるのである。また珍海は往生の得失に関して次のような見解を示している。

應知。所言懈慢國者、即是極樂之邊地也。所言執心不牢固者、即是、暫信暫不信義。胎生之人疑惑中悔、即懈怠過。又疑惑之人應入惡道。佛、既引之、懈慢之輩、將生極樂。佛何捨之。故知懈慢即是胎生宮。故順次生爲決定也。<sup>(33)</sup>

【訓読】まさに知るべし。言ふ所の懈慢國とは、即ち是れ極樂の

邊地なり。言ふ所の「執心不牢固」とは、即ち是れ、暫信暫不信の義なり。胎生の人の疑惑中悔は、即ち懈怠の過なり。また疑惑の人は應に惡道に入るべし。佛、既にこれを引きて、懈慢の輩を將に極樂に生ぜしめんとす。佛何ぞこれを捨てんや。故に知んぬ。懈慢は即ち是れ胎生宮なることを。故に順次生を決定とするなり。

この部分では、「懈慢國」とは極樂の中の辺地であると理解すべきであり、「執心不牢固」とは「暫信暫不信」の意味である。胎生の人「疑惑中悔」というのは、怠惰の過失であつて、疑惑の人は惡道に入るべきであるが仏は現にこれら懈慢の者を引いて極樂に往生させようとする。仏はどうしてこれらの人々を見捨てることがあるうか。ゆえに懈慢は胎生であることがわかる。であるから第二の生涯を決定とすると<sup>(34)</sup>。ここでは「疑惑中悔は、即ち懈怠の過なり」と述べて、疑心と懈慢を会通させ、惡道に入るべきであるが阿弥陀仏はこれを引き上げて極樂に往生させようとするので、懈慢は胎生であるとされている。珍海における決定往生に対しての基本的な立場は、一向專精進信受によつて阿弥陀仏を念じ、極樂へ往生して仏と見えることこそが信心の得なのである。しかし、一向專精に信受できない「暫信暫不信」という心の状態が不確かな、疑惑雜修の者も極樂へ往生させようと試みるのである。そして、暫時ながらも信じていたとする「暫信」による信心側の得と、疑惑不信の「暫不信」側の失の因を組み合わせたことによって、得の仏願力の方が勝ることにより、極樂へ往生する

という果報を得るのである。しかし一方で、仏の教えや、經文等を疑惑した報いも受けなければならないので、胎生となるのである。

## おわりに

以上ここまで『決定往生集』『正果決定』における辺地胎生の構造を「暫信暫不信」の得失という点に注目して考察をおこなった。珍海が論じる辺地胎生とは、暫らく信じていた「暫信」による往生の得と、暫らくは信じなかったという「暫不信」による「失」双方の因を組み合わせることによって極楽の辺地への胎生による往生を認めているのである。

珍海が説示している暫信の得とは、『無量寿經』の三輩段である。対して「暫不信」の失とは、「正果決定」に引用される經論偈の中から『平等覺經』、『菩薩處胎經』、『十住毘婆娑論』、『後出阿弥陀仏偈』に基づいて三品の失を提示していることを新たに見出すことができた。『決定往生集』における「信心決定義」の基本姿勢となるのは、疑い（疑心）を雑えずに信心を確立させることである。しかしそのような境界を得難い心の状態が不確かな中下輩人であっても、暫信と暫不信による極楽往生と辺地胎生という二重構造の中から、極楽へ往生していることを肯定的に取り上げることによって、中下輩人でも「決定往生」できるということを見出したのである。

末尾ながら本研究にあたり、奈良県立図書情報館には「元禄版『決定往生集』」の閲覧等格別なご配慮を賜った。御礼申し上げる次第である。

## 〔注〕

- (1) 恵谷隆戒は「安養知足相對抄に就いて」（『専修學報』第二号、一九三四、總本山知恩院専修道場編）において正果決定を、「決定往生する淨土は色身妙なりと雖も、化生胎宮の土であつて最勝無比眞實の土ではないと主張して、何處までも純粹淨土教の立場に於て主張する報身報土説とは異なっており、化身化土と判じてゐるのである。」と述べて概略を示している。
- (2) 曾和義宏「辺地胎生往生について」（『浄土宗学研究』第二十七号、八三頁、二〇〇〇年、平成十三年二月一〇日月例研究会報告）を参照した。
- (3) 若林隆壽「珍海の「辺地胎生」と「懈慢国往生」に対する捉え方について」（『大正大学浄土学研究室大学院研究紀要』九号、一九八三）
- (4) 成瀬隆順「珍海の本願観についての一考察」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』六一号、二〇一五）
- (5) 若林隆壽（前掲論文）三〇頁。
- (6) 若林隆壽（前掲論文）三〇頁。
- (7) 成瀬隆順（前掲論文）七四頁を参照。
- (8) 成瀬隆順（前掲論文）七四頁。
- (9) 本研究では、奈良県立図書館所蔵「元禄九年版『決定往生集』」（以降「元禄本」と略す）を底本として使用するため、『決定往生集』に限り、「大正」と「浄全」の対応箇所を併せて記載する。
- (10) 坂上雅翁「珍海の往生思想」（『浄土宗学研究』第一〇号、一九七七、知恩院浄土宗学研究所）一二二頁。
- (11) 阿毘達磨、唯識等の經典（『集異門論』一二、『法蘊足論』一、『瑜伽師地論』五八、『顯揚聖教論』一）では「信」に翻対するのが「疑」であり、その規定の中に否定的な表現として「不決定」が使用されていることを佛教大学、藤堂俊英名誉教授によりご指導賜ったが、本稿では十分に論及することができなかった。今後の課題としたい。

- (12) 珍海が提示する「信心決定義」を筆者が「疑心を抱かずに教えを信受すること」とし大前提（総）と位置付ける根拠は、『決定往生集』序論部に珍海が著述の動機として、「文理を考尋して、將に疑滯を流さんとて、心を決定往生に安んじて快く終焉の來迎を期せんと欲す。」（『元禄本』一丁右・『大正』八四、一〇二頁下・『浄全』一五、四七四頁上）と述べていること。また坂上雅翁（註10参照）の論考に基づいている。坂上雅翁（前掲論文）。拙稿（『決定往生集』序論における著述の動機）『佛教論叢』第六十三号、二〇一九）等を参照されたい。
- (13) 若林隆壽「珍海の「辺地胎生」と「懈怠国往生」に対する捉え方について」（前掲論文）

成瀬隆順「珍海の本願観についての一考察」（前掲論文）

- (14) 『決定往生集』（『元禄本』一一丁右・『大正』八四、一〇四頁中・『浄全』一五、四七八頁上）

- (15) 辛嶋静志「『大阿弥陀經』訳注（六）」（『佛教大学総合研究所紀要』一二号）、一〇頁注四十を参照した。

- (16) 成瀬隆順「珍海撰『決定往生集』における第二十願の位置づけ」（『印度學佛教學研究』六四卷二号）五七六頁において、『決定往生集』第五「修因決定」に、善導「觀經疏」一「就行立信積」所説の「順彼仏願故」の文を珍海が『無量壽經』第十八願ではなく第二十願としたことに注目し、「下輩人の暫信による順次往生」を信心決定義とする珍海の立場によれば、上輩人の願である第十八願の專修の称名念仏は、機根が劣る下輩人にはとうてい成就することは難しい。そこで、係想を諸行併修、すなわち雑修と捉え、『平等覺經』の「暫信」の人と会通することにより、論者によっては順後生の願と捉える第二十願を下輩人の順次生の願とする。」と論じている。

- (17) 『決定往生集』（『元禄本』三丁右・『大正』八四、一〇三頁上・『浄全』一五、四七四頁下）

- (18) 『決定往生集』（『元禄本』一三丁右・『大正』八四、一〇五頁上・『浄全』一五、四七八頁下）

- (19) 『決定往生集』（『元禄本』一四丁右・『大正』八四、一〇五頁上・『浄全』一五、四七八頁下）

全』一五、四七九頁上）

- (20) 『決定往生集』（『元禄本』一四丁右—左・『大正』八四、一〇五頁上・『浄全』一五、四七九頁上）

- (21) 『菩提心集』（『浄全』十五、五一六頁上）には次のように示している。

問。往生の緩く勤め懈りやすするらん人は得生れずや。

答。經に云く、極樂の道に懈怠國といふ處あり。往生の心ゆるやかなる者は、かの國の樂みを見て止まりぬといへり。其國極樂には及ばねど樂しき處なり。佛はましまさず。然も彼人、物の命を殺さずして、人にも其功德を教ふ。これに依て後に極樂に生るる事を得る也。

ここでは極樂への道の途中に懈怠國が有り、往生の心が緩やかな者はその國の樂しみを見てそこへ留まる。極樂には及ばないが楽しいところである。不殺生の功德によつて後に極樂へ往生するとしている。また『決定往生集』において珍海が度々取り上げる疑心や懈怠について、永觀の『往生拾因』では、「實疑心懈怠往生之重障」と示されているように、疑心や懈怠が極樂往生に際しての重大な障害となると理解されている。

- (22) 『決定往生集』（『元禄本』一五丁左—一六丁右・『大正』一〇五頁中・『浄全』一五、四八九頁下—四九〇頁上）

- (23) 淨影寺慧遠『無量壽經義疏』（『浄全』五、五二頁下—五三頁上）。訓読に関しては佛教大学図書館所蔵、寛文九年版本の訓点を参照し適宜筆者の責任において修正を加えた。

- (24) 『無量壽經』（『浄全』一、三三—三四頁）

- (25) 珍海が『無量壽經義疏』における得失解釈の説示を受けて、「九品に約して得失を論ずるのみ」と述べている。筆者は未だ淨影の思想を十分に理解できていないので、本稿では珍海の文言に依つて論じておくこととし、淨影の内容に関しては今後の課題とする。

- (26) 『決定往生集』（『元禄本』一三丁左・『大正』八四、一〇五頁上・『浄全』一五、四七九頁上）

- (27) 『無量壽經』（『浄全』一、一九頁）



- (28) 同右
- (29) 『無量寿経』（『浄全』一、一九―二〇頁）
- (30) 『決定往生集』（『元禄本』一二丁右左、『大正』八四、一〇四頁下・『浄全』一五、四七八頁下）
- 『平等覚経』（『大正』一二、二九二頁中）
- (31) 『決定往生集』（『元禄本』一四丁左―一五丁右・『大正』八四、一〇五頁上中・『浄全』一五、一七九頁上下）
- 『菩薩從兜術天降神母胎説広普経』（『大正』一二、一〇二八頁上）
- (32) 『決定往生集』（『元禄本』一二丁右―左・『大正』八四、一〇五頁上・『浄全』一五、四七八頁下）
- 『十住毘婆沙論』（『大正』二六、四三頁中）
- 『後出阿弥陀仏偈』（『大正』一一、二七八頁中）
- (33) 『決定往生集』（『元禄本』一六丁右―左・『大正』八四、一〇五頁中―下・『浄全』一五、四八〇頁上）
- (34) 成瀬隆順（前掲論文）参照。

（はつとり じゅんけい 文学研究科仏教学専攻博士後期課程）

（指導教員…本庄 良文 教授）

二〇一九年九月三十日受理